

## 平成二十二年度 富山国際大学入学式祝辞

霞たなびくこの春のよき日、ここに御来賓並びに関係各位のご臨席の下に、平成二十二年度の入学式を挙行できますことは、本学関係者にとって喜びに耐えないところであります。田中学長から入学を許可された二百十五名の新入生諸君、おめでとうございませう。また、御子弟をここまでお育てになり、本日御出席の保護者、御家族の皆様に、心からお祝いを申し上げます。

富山国際大学は、平成二年、富山県の自治体、企業、個人の協力により、地域の輿望を担って開学。「人間形成」を理念とし、国際化、高度情報化社会に対応できる人材養成を目的としました。しかし、予想以上に速やかに進む社会の変化に対応するべく、今日まで改革を進めてきたのであります。

田中学長が申されたように、諸君の現代社会学部は、現在の地域の社会ニーズに対応すべく、生れ変わった富山国際大学の記念すべき第一の出発でありました。さらに、引続き第二の、新しい諸君の仲間、「子ども育成学部」は、昨年開設しました。この全く異なる専門性をもつ両学部を、あえて組み合わせた車の両輪として、幅広く未来に向う、新しく力強い富山国際大学の組織構造が確立されたと私は考えます。

さて諸君。私はここであらためて第一に、「大学で学ぶ」ということについて一言述べ、自ら学ぶという学長の式辞を、セコンドしたいと思います。諸君は大学生です。生徒ではなく学生。ではどこが違うのか。自ら足を運び、自ら知識を吸収し、積極的に自ら真理の探究につとめる。高校までであった、いわば生徒を乗せる教育エスカレーターはありません。自力で一步一步登る階段しかない。大学は、諸君を知的に「鍛える場」です。我々が運んでは、諸君の精神力は鍛えられない。自分で足を運び、努力して下さい。しかし学識豊かな教授陣が諸君の熱い問いに、身をもって答え、助けてくれます。その結果、本学において、生まれて初めて、「学ぶよろこび」を体験するはずであります。知識は大事ですが、たとえ最新の知識を学んでも知識の断片は十年、二十年後には古くなり、役立たなくなる。「学ぶことを学ぶ」基本を体験するのが、大学です。諸君がこの「如何に学ぶか」という基本を学び体験するなら、それは諸君の脳神経回路に深く組み込まれて、一生の間、働き、諸君の人生を支えます。

第二は、「研究する心」。私は化学者ですが、五十年も前に、僅か一年半アメリカへ留学した体験が、この半世紀を一貫して私自身の一生の教訓になりました。それは「研究」する Spirit, チャレンジする Spirit です。当時の、私のような学位をとりたての若者も、教科書で名前だけ知っていたような世界の有名学者も、研究心さえあれば、全く対等の立場で、白熱の議論を戦わせる場に参加しました。真理探究の前には、年齢も権威も国籍も学歴も性別も関係ない。科学研究の世界では、独創性がすべてです。まさに、カルチャーショックでした。

ではこの日本ではどうか。何でも平等・横並び。学校で人と違うことをするといじめられる。人と同じことをやれば無難。お役所へいくと「前例がないからダメ」。ところが不思議なことに、誰かが何か面白いことをやると、たちまち日本中でマネが始まる。全国マスコミ・テレビは、不思議なほど、いつも同じことを一斉に喋る。異口同音に誰かをほめちぎり、急に或る日揃ってけなすようになる。国民・大衆はすぐそれに同調し、カンタンに一斉に踊らされる。こんな情けないマスコミ踊りをしていて、一体、日本はいいのか。アメリカでは、とくに、「研究の世界」では、全く逆なのです。人のマネをすることは価値が無い。個性がなく、むしろ恥ずかしいことで、評価されない。誰かが面白いことをやると、自分はそれとは「違うこと」を研究して認められようと、必死になるのです。だからこそ、アメリカの科学は、世界をリードしているのです。皆さん、どう思いますか？この国際大学で、今までとは全く新しい気持ちで、一人前の大学生として、学ぼうではないか。

諸君。学ぶ大学生、研究する若者たるものは、失敗を恐れてはならない。三振を恐れるバッターは、ヒットを打てる見込みなし。イチローをみて下さい。メジャーリーグで三割を打つのは大変なことだが、そのイチローも、七割はアウト。七割のアウトの中から苦心して工夫をこらし、次の三割を創り出しているに違いない。バンクーバーでメダルを取った選手も、皆同じ苦労を経験しているはずです。たゆまず強い志をもって目的に立ち向かう時、失敗の痛みや苦しみの中からこそ、創造が生まれるのであります。

諸君。「研究」とは一体何か。前例のない、成功の保証も無い、誰も知らない未知の分野に、度重なる失敗にも屈せず、真理探究の情熱と強い志だけに燃えて、身体を張って立ち向い、オレはもうダメかと思う頃、ある日突然前途が開ける。世にもふしぎな世界なのです。私はそういう世界に半世紀、

生き続けてきました。しかしこれぞ何とすばらしい、比類の無い、人間の創造的活動ではないかと思う。私の場合は、アメリカで国際他流試合に放り込まれ、日本仕込みの一人よがりの専門根性を、タテヨコ十文字に叩き直されて、うかつにも初めて納得がいき、五十年前に吹っ切れたのであります。

新入生諸君。行動する、研究する若者には、失敗は当たり前のこと。何も今、アメリカへ行くことはない。この皆さんの人生最大・最後の拠点、富山国際大学で「研究し、学ぶ熱い心」を学びとり、できる強い「人間力」を身につけてほしい。アメリカで「Change」を主張したオバマ氏も、今は苦勞している。わが富山国際大学も、地域社会のニーズに応え、Change, 変革、進化を重ねてきました。オバマ氏は、勝利宣言 Victory Speech では、Change has come to America. Yes, we can. と叫んだ。ならば我々はここで Change has come to Toyama University of International Studies. Yes, we can. と高らかに言おうではないか。

問題山積の二十一世紀。政権交代、混迷の日本状況の中でこそ、若者よ、未来への夢と希望をもって、共にチャレンジしようではないか。

最後になりましたが、理事長として一言申し上げます。森市長をはじめとする御来賓、そして御両親、保護者の皆様方には、年度初めのご多忙の中、御臨席下さいましてまことに有難うございました。

富山国際学園は、大学、短大、高校、幼稚園を擁する北陸の代表的総合学園として、我国の高等教育をめぐる情勢の厳しい中、未来を指向し、生まれ変わりつつある Change する富山国際大学として、日本と、富山県民のため、つとめております。御来賓、保護者の皆様におかれましては、どうか今後とも宜しく御指導・御鞭撻、そして御支援・御協力をたまわりますようお願い申し上げます。有難うございました。

平成二十二年四月六日

学校法人富山国際学園理事長 金岡 祐一